

仙台城の門松を復元する —伊達政宗のみていた正月飾り—

仙台市博物館学芸普及室 倉 橋 真 紀

はじめに

現在、我々が正月に目にする商店やオフィスビルといった建物の入り口に飾られる門松は、土台に菰などが巻かれ、松の枝や南天、笹の葉などを飾り、そこから先端を斜めに切った三本の竹が伸びる形が一般的である。しかし、江戸時代に仙台城に飾られていた門松の形はまったく違うものだったことが、根白石村（泉区根白石）に残されていた古文書などからあきらかになった。

その形の門松はいつから仙台城に飾られており、どのようなものだったのか、なぜ根白石村にそれがわかる古文書が残っているのか。

根白石村の門松に関わる古文書の分析から始まった仙台城の門松復元にいたる過程とあわせ、伊達政宗と根白石の関わりなども紹介する。

なお、この論考は、令和元年12月に行った一般社団法人心のふるさと創生会議の主催した表題の講演内容をもとにまとめたものである。

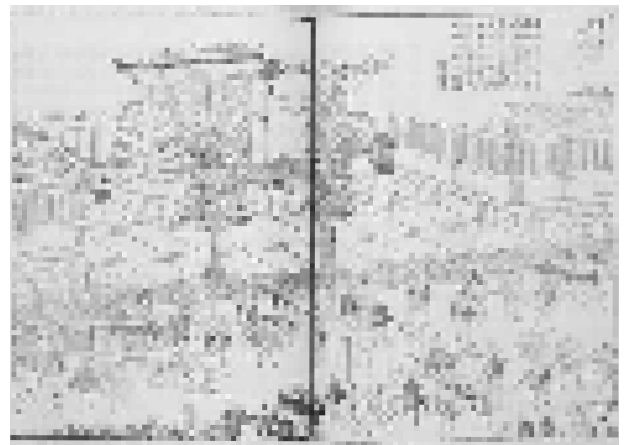
1 江戸時代の門松

門松とは？

門松は新しい年の神様、年神様を迎える場所を示す目印で、神が降りる依代だとされる。そのため、神が宿ると考えられていた常緑の葉を持つ樹木で作られ、神のための清浄な空間を仕切るものとも考えられている。門松を飾る習俗は10世紀ころからあるが、もともとは材料も形も地域によって大きく違い、飾るか飾らないかという根本的な違いすらあった。

江戸時代には、各藩の城門、商人・百姓の屋敷の入口などにいろいろな形の門松がみられたことが、絵図や各地の習俗・年中行事を描いた書物などで確認できる¹⁾。

例えば、『江戸名所図会』²⁾「元旦諸侯登城の図」には、元旦に江戸城に向かう大名たちの行列が描かれているが、その道筋にある大名家の門の前に建てられた門松は、門の形に組み上げられたとても大きなものだ。土台からまっすぐ1メートルほどは伸びているような柱（おそらく竹や松を束ねた状態のもの）の先から枝が左右に三層に枝分かれした三蓋（階）松が大きく伸び、さらにその上から数本の笹竹が葉を広げ、



1 『江戸名所図会』にみえる門松

門の上部に到達するほどの高さとなっているようすがみえる。左右の松をつなぐ木の種類は不明だが、その木にはワラをたくさん提げた独特のしめ飾りのようなものが付けられ、真ん中には伊勢エビの飾りがある。

江戸時代には、ここにみられるように、入口の両脇に高い柱を建て、それをつなぐ横木のある門のような形を作る門松が多かったようである。

2 仙台城の門松

「御門松上げ人」の記録から探る

平成に全32巻を刊行した『仙台市史』のなかの1冊に『特別編9 地域誌』³⁾(以下、『地域誌』)がある。『地域誌』では、明治22年(1889)に仙台市とともに成立した、現在の仙台市域に含まれる周辺14町村について、それぞれの通史を記述している。

筆者は『仙台市史』編さん当時、仙台市博物館内におかれた仙台市史編さん室の職員として『地域誌』の編さんに携わったが、14町村のうち「根白石」地域の執筆担当でもあった。この地域には江戸時代に代々根白石村の肝入を務めていた鷺尾家が所蔵する膨大な文書群⁴⁾(以下、鷺尾家文書)が残されており、仙台市史編さん室の調査のなかで、江戸時代の仙台藩について様々な知見が得られる文書群であることがあきらかにされていた。なかでも筆者が特別な事例として興味を持ったのが、仙台城に建てる門松の材料を根白石村に住む「御門松上げ人」と呼ばれる8人の百姓が納めるのが恒例だったことに関わる史料である。過去に『宮城郡根白石村史』⁵⁾や『せんだい歴史の窓』⁶⁾でもそれらの史料は紹介されていたが、詳細な研究はなされていなかった。

肝入鷺尾家は「御門松上げ人」の一人でもあった。そのため鷺尾家文書には、門松のために切り出した木材の本数・材質・寸法や、その作法、門松上げ人の変遷などがわかる史料が含まれていた⁷⁾。

もっとも古い寛文10年(1670)の記録が書き写された史料の冒頭は、虫食いなどで欠損している部分もあるが、関連史料などから文字を推測することができ、木材の本数・寸法や、初期の門松献上の状況を知ることができる貴重なものである。以下に冒頭部分のみ記す。

根白石村御門松納申候者共御訴訟申□候⁸⁾

一、御門松 四拾式^(門)□五か^(い)□□ □の葉ちかや□ □

一、新柱 八拾四本 長壺丈壺尺より三尺、廻り□ □

一、鬼うち木 式百五拾式枚 長三尺、はゝ五寸

^{御年重}
一、御門松 五門五かい

一、新柱 拾本 長壺丈壺尺

一、鬼うち木 三拾枚

一、御護摩木 式駄

右之通、木数合大小四百七拾本、年々極月廿七日ニ納申候、為御祝金子壺分判七切、御年重御座候^(節)□金子壺切被下置候、右之御祝儀被召上候而も、御郡役諸役御免被成下候様ニ申上度御事、

一、御門松ニ添申竹指上申候者ニも御郡役御引被下候、其外薬師^(堂)□御の板指上申候者共、同所御的矢上ケ申候者ニも御郡役諸役御引被下候間、拙者共ニも御郡役諸役共御免被成下度候、段々御旦

付様御屋敷^(等力)□之御門松、太分被仰付、其上御家御繁昌之御祝儀之御事ニ御座候間、拙者共持高拾
壹貫百九拾貳文之御諸役御免被成下候様被仰上可被下候、以上、

組頭
次右衛門

寛文拾年六月五日

同
市郎左衛門
三四郎
十左衛門
卯左衛門
左兵衛
権右衛門
善三郎

^(為重)
朴沢九左衛門様

松岡弥市右衛門様

前書之通、毎年御吉例を以御門松拙者ニ被仰付、私手前より右八人御百姓中相定申付候処ニ、為
御祝儀従 御先代^(為重)壹分判七切被下置候処ニ指上為威光之ニ御座候間、御郡役諸役御免被成下度旨
御訴訟申上候所ニ、今十三日、外記殿^(柴田朝意)・志摩殿^(古内義如)・和田織部殿^(房長)・田村図書殿^(顯住)、御目付衆被相加、御
吟味之上御郡役御諸役御免被成下候并鬼討木取申候枝木・うら木之分ハ如跡々^(後)被下置、御郡役諸
役御郡方ニ而相除被申御書付被相出可被下候、以上、

朴沢九左衛門

寛文十年十一月^(カ)十七日

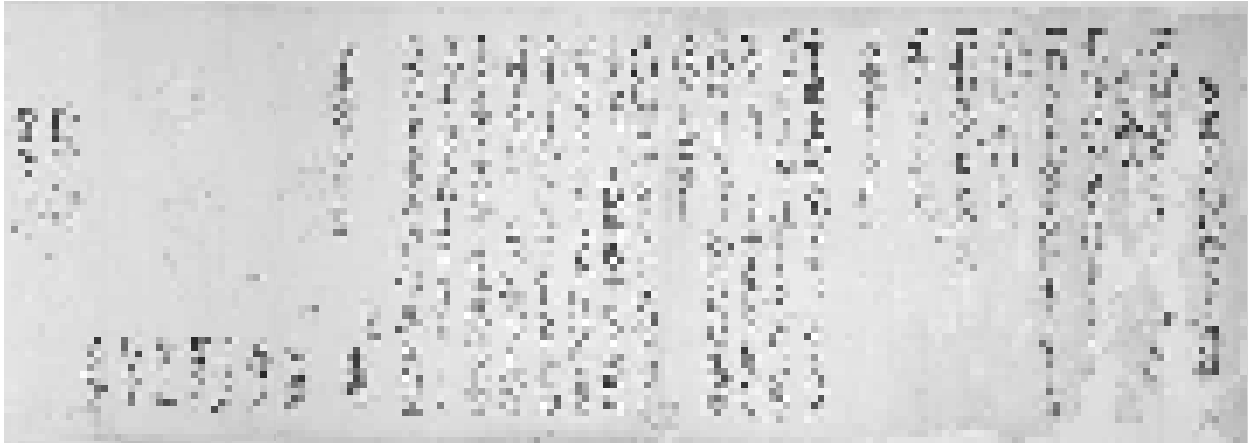
織部殿

※読点、波線共筆者

この史料からわかる木材の形状や本数は以下のようなになる。

寛文10年ころ、「門松」(門松用の松)は42門分、1対を1門と考えると84本の松が必要だった。さらに
その松は「五かい」松だと記されている。三階松でもかなりの大きさだが、ここではさらに枝が五層に分
かれている五階松が揃えられている。ほかの木材としては新柱(芯柱)と「鬼うち(討・打とも記す)木」
という板が付く。鬼打木は計算すると1本の松に対して3枚ずつ必要なことがわかる。また、門松の献上
は正月だけでなく、^{としがさね}年重の行事がある年にはその分も必要だった。年重とは厄年の人がいる場合、2月
1日にもう一度正月を祝って厄落としをするものである。仙台城では、年重のために正月を祝うことを門
松を飾ることで表していたということで、その年は通常の正月分以外に、年重分も用意しなければなら
なかった。

なお、この史料には記されていないが、門松上げ人の献上行為には根白石村^{おほやし}の御林(藩有林)から門松
に必要な材料を切り出すだけでなく、仙台城へ納めに行くことまでが含まれている。根白石村から仙台
城まで中山峠(泉区南中山実沢、青葉区中山付近)を越える根白石在郷道を通ったとすれば、おおよそ13
kmにはなり、運ぶ本数とあわせてその負担は相当なものであったろう。



2 門松献上に関わるもっとも古い記録の冒頭 近年補修して裏打ちしたが、調査時は虫損、糊はがれなどで原状の推測が難しいほどだった

門松献上に対しては波線部にあるように「先代より」ご祝儀（下賜金）が渡されるようになったと記されている。先代が1代前という意味であれば第3代仙台藩主伊達綱宗の時代ということになるが、先代が今よりも前を指す場合もあり、具体的な年代は特定できない。いずれにせよ、根白石の門松献上が仙台藩政下の早い段階から慣習となっていたということである。

史料によると、門松は根白石村に知行地を持つ朴沢為重（平士、300石）が8人の百姓に申し付けて献上するという手順を踏んでいるようだ。しかし、仙台藩の場合、拝領形態にもよるが村内に知行地がある藩士でも村全体を支配しているということは意味せず、藩主からのご祝儀は百姓たちに渡っていると読めることから、朴沢は仲介的な役割を果たしていたと推測される。

ここで百姓たちが求めているのは藩主という「威光」からのご祝儀ではなく、「郡役諸役」の免除、つまり諸税免除である。門松献上を始めた当初は仙台城に飾る門松材料を藩主へ献上し、ご祝儀をいただくことを名誉と受け止めていたのだろうが、献上の負担が重くなるにつれ、この行為は税負担と同じ受け止めになってきたのではないか。「年々御目付様屋敷」の分まで、というように仙台城以外の材料まで求められていることが門松上げ人の負担増につながり、藩主という「威光」からも離れているという意識にもつながったのかもしれない。

その後、この百姓たちの願いは聞き入れられ、郡役諸役は免除となった。図版3の表にあるように、門松の献上本数が減少していったこともわかる。また、この表であげた史料には木材の種類が記されているものもある。これらの史料を追っていくと、朴沢氏の名前は見えなくなり、変わりに実際に木材の必要本数を伝えたり、門松を建てたりすることを担ったと思われる「御門松建て役」という肩書きの藩士が登場する。仙台城の門松を納める役を代々務めることは百姓としての名誉であり続けただろうが、藩から命令された本数を納品する仕組みへと変わっていったのだろう。しかし、木材の寸法や木の種類、一つの門松に使う部材（特に鬼打木）の枚数は変更がなく、時代が下がっても作成される門松の形は変更がなかったと考えられる。

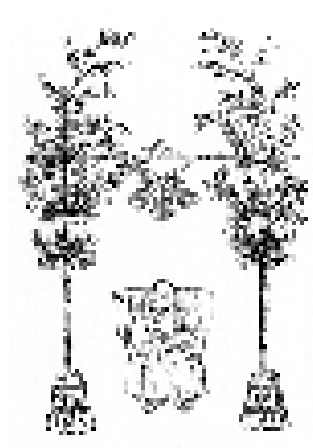
	年 代	飾る月	門松（松）		鬼打木（檜）		芯柱（栗雑木）		備考
			本数	形態	枚数	寸法	本数	寸法	
①	寛文10年以前 (1670)	正月	84 (42門)	五階	252	長さ3尺 幅5寸	84	長さ1丈1尺～ 1丈3尺	
②		2月	10 (5門)	五階	30		10	長さ1丈1尺	
③	文化11年カ (1814)	2月	12	五階・七階 各3対	36		12	長さ1丈2尺～ 1丈3尺	藩主19歳
④	文政6年 (1823)	正月			(2本)	丸太3尺、 廻り6・7尺	38	長さ1丈1尺5寸～ 1丈3尺 廻り1尺5・6寸	
⑤	文政12年 (1829)	2月	6	五階	18	長さ3尺 幅5寸	6	長さ1丈2尺 廻り1尺3寸	綏姫（斉邦室、 伊達氏）7歳、 依姫・佑姫3歳

※以下の鷲尾家文書により作成。①・②根白石村御門松納申候者共訴訟御役御免願（M8）、③〔門松献上願関係文書〕（E139-2-1）、④〔門松関係書綴〕（E193-3）、⑤諸御用永留帳（A18）

3 鷲尾家文書にみえる仙台城の門松木材

絵図・写真から探る

納められた木材はどのような門松となったのだろうか。鷲尾家文書の史料では材質や寸法についての手がかりは得られるが、具体的な形については記されていない。しかし、少ないながらも絵として残っている手がかりもある。図版4・5は仙台城下の版木屋山田屋の板下絵として紹介されているもの⁹⁾と、天明の飢饉のころの佐沼（登米市）の正月のようすを描いたとされる『天明飢死図集』¹⁰⁾にみえる飾りである。現在のものとまったく形が違



4 『仙台郷土研究』に城下の門松として掲載されている絵



5 『天明飢死図集』の門松を描いた部分

うが、この絵は仙台藩の門松を描いたものとして紹介されてきた。

「御門松上げ人」に関わる史料を所蔵していた鷲尾家でも、昭和40年代まで家の長屋門に絵にあるような飾りを付けていた。また、根白石地域でも似た形の門松の写真¹¹⁾が残っており、根白石の門松はもと

仙台藩士の門松の記録から探る

根白石村の材料で門松が建てられ、前述のように仙台城以外からの需要にも応えるために献上本数が増加していったという状況からは、仙台城に飾られていた形の門松は、藩士たちにも広まっていたと考えて

よいのではないだろうか。そのため、形については仙台藩士の年中行事書も参考してみたい。

仙台城下に居住していた仙台藩士河田家（平士、300石）に伝わった『河田家年中行事書』¹²⁾に門松の形状についての記述がある。明治31年（1898）に書かれたものだが、江戸時代から続く行事をまとめ直したと史料の冒頭に記されている。そのなかに門松の形について書かれている部分がある。

御門松^{かとまつ}或三^{ごさん}かい二本御門^{もん}の両脇^{りやうわき}へたて、さゝ竹をわたし、薪木^{たきぎ}をまるき根^ねしめとす^{これ鬼打木と云}、わらにて組^{くみ}たる物を両方より打ちかい^{けんたい}やは紙^{いふ}を下ケ、炭^{すみ}を紙につゝミ、水引^{すゐひ}をかけ、紅^{べに}をつけ、もちきの柚^ゆ、くし柿^{がき}を結ひつけてかざりとす、

※ふりがなは原本の通り、読点筆者

この記述からは門松の具体的な形が推測でき、鷺尾家文書の門松との共通点も見いだせる。

河田家は中級藩士の家ではあるが、松は仙台城と同様に五階松、あるいは三階松を使っている。二本の木材を門の両脇に建てるということは、門の前にさらに柱を建て、その二本に笹竹を渡す、門のような形のものだろう。「まるき根しめ」というのは、建てた柱の根元を丸く囲み、根締めのように添えたもので、この根締めの薪を鬼打木と呼んでいる。ワラで組んだものを「両方より打ちかい」は、ワラで編んだ注連縄を両側から伸ばして交差させる状態で、これが「ケンダイ」と呼ばれている。これに下げるとしている「やは紙」は、正月飾りを納める年中行事の時のかけ声「ヤヘー」と音があっており、ここでは正月飾りに使う紙全般を指すのかもしれない。単に紙を下げるだけでなく、しめ飾りのように飾りが付き、炭を包んだ紙に水引をかけて留め、紅を付け、「もちきの柚¹³⁾」と「くし柿（干し柿）」を付けて飾りとしている。柚やくし柿を「結ひつけて」いるのはしめ飾りでいえば中央部分だろう。この記述からは、神社の鳥居に注連縄を付け、真ん中にしめ飾りを付けているというようなものをイメージできるのではないだろうか。

仙台城の門松復元へ

こうした史料をもとに、「仙台城の門松」を実際に復元し作成することが可能か、仙台市博物館内で検討し始めた。しかし、江戸時代から続く門松を飾っていた家や、現在も飾る家を何カ所か調査しても、時代を経て簡略化されてしまったものが多く、絵図に見られるようなものとほぼ一致するものを飾っている家は探せなかった。また、「仙台城の門松」というからには、根白石村で作られていた門松を基本としたと考えていたが、肝入鷺尾家でも、伝統的な門松を飾っていた根白石のほかの家でも、その形の門松はすでに飾ってはいなかった。復元にいたらなかったもっとも大きな理由は史料のなかで「ケンダイ」と呼ばれている注連縄の中央に取り付けられる独特な形の飾りを作っている人に出会えなかったことだった。

その後、復元へと大きく動いたきっかけは、くしくも東日本大震災後に震災の被害にあった古文書や文化財を保全するために、仙台市域全体を対象に行った仙台市博物館主体の資料レスキュー活動である。

沿岸地域の被害は甚大だったが、山間地域でも蔵の倒壊などが原因で古文書などが廃棄されるということが起きており、緊急性の高い沿岸地域の調査を行った後、山間地域でも聞き取り調査を行っていった。そのようななか、仙台藩の所有する山林を管理する御山守^{おやまもり}という役職を務めていた根白石の旧家を訪れた際、その旧家では現在も江戸時代から続く伝統的な門松を作成していることがわかった。その旧家で以前に飾った門松の写真を確認すると、絵図で見たケンダイとほぼ同様の飾りが確認できたのである。ケンダ

イには炭を包んだり、紅をつけたりしていることもわかり、河田家の門松とも共通点が見いだせた。

その旧家のケンダイ作成方法を教えてもらうことが可能となって初めて復元は具体化したのである。

当初この仙台の伝統的な門松復元の事業は、地域の歴史の再発見につながる試みとして、東日本大震災復興支援事業の予算を充てることができ、仙台市博物館だけでなく、仙台歴史ミュージアムネットワーク（歴ネット）¹⁴⁾ 参加施設のうち、瑞鳳殿・仙台市歴史民俗資料館・仙台文学館の計4施設で始めることとなった。しかし、松や竹の生木で門松を建てる場合、施設内に害虫を持ち込む懸念があり、生木で建てる方法と、プラスチックの支柱や薬剤処理を行った松などでレプリカを作成する方法の2種類で復元することとした。

生木のものは屋外に建てる瑞鳳殿・仙台文学館に設置した。形については入手できる木材の大きさが限られることや、設置場所の広さなどに制約されるが、三階松から笹竹が伸び、風に吹かれるようすは、江戸時代の正月の風景を感じてもらえるものだと思う。

レプリカは仙台市博物館・仙台市歴史民俗資料館に設置した。特に仙台市博物館のものは、仙台城の門松に一番近い形、大きさとなるような仕様としている。仙台城の大手門前に建てられたと想定される約4メートルの高さの門松を生木で作成するのは難しいが、この仕様により門松は見上げるものだったことは伝わると思う。

現在は歴ネット参加施設のうち8館が年末年始にこの門松復元展示を行っている。ケンダイの作成技術の継承という目的もあり、旧家の指導を受けながら、歴ネット参加施設の職員などが毎年ワラ打ちから行って注連縄を緋い、作成を続けているのである。

3 伊達政宗と門松

政宗が見ていた門松

仙台城の門松の復元過程をみてきたが、いつから、なぜ根白石村から仙台城の門松を納めるのかという疑問は残る。初代仙台藩主伊達政宗が門松を詠み込んだ和歌にそれを探る手がかりが残されている。

年のうちに又あらたまる春霞

かさねし代々の門の松が枝

（年の内に又改まる春霞重ねし代々の門の松が枝）



6 根白石村御山守家の門松 もともとある冠木門をいかして作られている 平成23年撮影



7 仙台市博物館ロビーに展示した門松 解説パネルを添えて展示している 平成28年撮影

これは元和8年（1622）、奥山大学常良の嫡子長十郎の7歳の年重に際して詠んだもの¹⁵⁾で、政宗の時代に年重に門松を飾る習俗があったことが確認できる。

また、政宗は寛永5年（1628）正月元日にも、江戸屋敷で「元日」と題して和歌を詠んでいる¹⁶⁾。

おさまれるみよのみきりのとしこへて

風もとせぬあらたまの春

（治まれる御代の砌の年越えて風も音せぬ新玉の春）

実はこの和歌には、政宗が絵を描き添えた掛け軸¹⁷⁾もある。その絵は「正月飾り」として紹介されてきたもので、下部は描かれていないのだが『天明飢死図集』などに描かれた門松とほぼ同じ形状、つまり復元された「仙台城の門松」と同じものにみえる。政宗がみていたのは、復元した門松と同じ形のものだったと考えられる。

政宗と根白石村

政宗は、慶長5年（1600）の仙台城築城開始以前から根白石とつながりがあった。

政宗の祖母栽松院（伊達晴宗室、岩城氏久保姫）は、政宗の居城が岩出山城に移った天正19年（1591）に白石城（泉区根白石字館下）に隠棲している。

実は根白石を通る道は、奥州街道が整備される以前、奥州を南北に移動する時の主要街道の一つだった。文禄元年（1592）正月、政宗は岩出山城から朝鮮出兵のため京都へ向かう時にも、この道を通ったと推測される。文禄3年に栽松院が亡くなると、遺言によって屋敷の跡に菩提寺宝積寺が営まれている。

また、元和8年（1622）に山形の最上氏が改易となった時には、政宗の母保春院（伊達輝宗室、最上氏義姫）を引き取り、仙台北下に住居が整うまでの仮住まいとして、政宗が鷹狩りや川狩りの際に利用していた根白石村満興寺にあった御仮屋^{おかりや}を用意している¹⁸⁾。

このようなつながりから、あくまでも推測の域は出ないが、政宗は文禄元年正月に根白石を通過して門松を目にしたのかもしれない、母や祖母を住まわせるからには、その地域住民への親密度、信頼度が高く、そうしたことが百姓たちからの門松献上にもつながったのかもしれない、などと想像するのも楽しい。政宗がより身近に感じられるのではないだろうか。

おわりに

仙台城の門松を探り、そこからたどりついた伝統的な門松の復元は、誰もがみてわかる歴史の復元ともいえる。

令和元年の年末より、心のふるさと創生会議でも仙台市の中心部にこの門松を建てることで、「歴史を生かしたまちづくり」を行うという活動を始めている。作成にあたっては歴ネットが協力し、歴ネットで門松復元を行ったメンバーとして筆者も微力ながら協力させていただくことができた。今後ともこの伝統的な門松が、こうした活動にいかされれば幸いである。

註)

- 1) 全国の門松が図版とともに紹介されている書籍類は少ないが『名古屋市博物館企画展 江戸時代の門松』名古屋市博物館（1994年）に多くの事例が掲載されている。
- 2) 7巻20冊、長谷川雪旦画、天保5・7年（1834・1836）刊行、仙台市博物館蔵
- 3) 仙台市、2014年
- 4) 当該文書群は平成29年度に仙台市博物館に寄贈された。
- 5) 宮城県根白石村役場、1957年
- 6) 菅野正道「門松を飾る」河北新報出版センター、2011年
- 7) 拙稿「仙台城の門松」『市史せんだい vol.20』、仙台市博物館、2006年
- 8) 根白石村肝入鷺尾家文書、資料番号 M8、仙台市博物館蔵
- 9) 『仙台郷土研究』第13巻第1号、1943年
- 10) 鈴木三伯著『天明飢死図集』（写本）、仙台市博物館蔵
- 11) 仙台市歴史民俗資料館『祭礼と年中行事』、2003年
- 12) 仙台市歴史民俗資料館蔵、「史料紹介『河田家年中行事』について」『仙台市歴史民俗資料館 資料集 第1冊』、2003年
- 13) 餅木として用いる柚ということか。餅木は小正月に使う、現在だと「だんごの木」などと呼ぶもののことかもしれない。
- 14) 仙台市内の歴史・文化系施設9館（史跡陸奥国分寺・尼寺跡ガイダンス施設、瑞鳳殿、仙台市縄文の森広場、仙台市戦災復興記念館、仙台市博物館、仙台市歴史民俗資料館、仙台城見聞館、仙台文学館、地底の森ミュージアム）で作る連携ネットワーク。
- 15) 元和8年2月朔日条、平重道編『仙台藩史料大成 伊達治家記録 三』、宝文堂、1973年
- 16) 寛永5年正月元日条、出典註15に同じ。
- 17) 佐藤憲一「新発見の伊達政宗筆『梅に雀図』について－伝来の経緯から－」(『特別展 松島 瑞巖寺と伊達政宗』図録、三井記念美術館、2016年)に写真が紹介されている。
- 18) 註7に同じ。

